

(3) 『日本随筆大成』旧二期第五卷、所収。

(4) 至文堂。

(5) 春陽堂。のち一九八一年、中公文庫。

(6) 一九七二年、東洋文庫、平凡社。

(7) 一説に宝暦三年以後に行われたとするが、この記事によって疑問が生じた。曾我祭りはここにいっようなに曾我兄弟への「報恩の為」であって、座の内部的性格が強く、『三』ではとられていない。

(8) 『民間風俗年中行事』所収、一九七〇年、国書刊行会。のち『続日本随筆大成』別巻、一九七六年、吉川弘文館。

(9) 注1

(10) 一九九二年、国書刊行会。

13. 現代日本の実用書にみる年中行事

クラウス・クラハト

一序

テュービンゲン大学日本学研究所では、かねてより日本文化の中の秩序のモデル、つまり過去および現在における、日本の公的・私的生活をコントロールしている根本規範とは何か、という問題の研究に重点を置いている。とくに一九八九年からは、その一環として、日常生活の様々な問題にアドバイスを与えてくれる実用書の検討をはじめている。その基礎資料となるのは、一八四〇年から現在までのエチケットとマナー(礼儀作法)の文献である。一九八九年以降、日本の国会図書館の支援により、現在、約一〇〇〇点を収集したが、一九九三年末までには、約二〇〇〇点になる見込みである。この研究の課題は、様々な実用書に収録されている次の分野の行動規範を、体系的に調査することである。(a) 一般的規範(食事、贈答、挨拶、その他)、(b) 人生のサイクルにおける規範(結婚、葬儀、その他)、(c) 年間のサイクルにおける規範(新年、衣替え、その他)、(d) 空間的場における規範(神社で、ホテルで、外国でのマナー、その他)、(e) 社会的場における規範(子供、女性のマナー、ビジネス・マナー、その他)。

今回の報告は、このうち(c)の領域に関するこれまでの調査の中間報告である。さしあたり、次の五点につ

いての理解を深めることをめざしている。(1)今日、全国的に行われている年中行事は何か、(2)これらの年中行事の主権者、企画者は誰か、(3)これらの年中行事の主題は何か、(4)これらの年中行事は、どの程度、規範文献のコンセンサスを得ているか。どの年中行事が、重要と見なされているか、(5)これらの年中行事は、一年のうちでどのように分散しているか。

なお、この報告には、以下の数値が現れる。(a)各年中行事につき、それを記載している規範文献の数、(b)年中行事とされているものの総数、(c)特定の主題に分類される年中行事の数、(d)一カ月間の年中行事の数。これらの数値は、現在の研究段階では、傾向を表しているにすぎない。全体の比率を知るためのヒントとして見られるべきものである。また、規範文献に記載されている事項は、その正当性を考慮することなく採用する。規範文献の一般の利用者も、それを検討することは、ほぼ不可能だからである。その意味では「誤った」記事事項にも規範的な効果があり、「正しい」記事事項と同様に、一つの規範となりうるからである。

二 データ作成

このプロジェクトの当面の課題は、総ての年中行事、即ち、規範文献に年中行事としてあげられている総ての催しのデータを収録することである。したがって、次のジャンルを調査の対象とした。(A)礼儀作法の本、(B)冠婚葬祭の本、(C)歳時記、(D)日常使用される暦、カレンダー(ポケット判、壁掛け型)、(E)日刊新聞(朝日、毎日)、(F)政府情報刊行物、(G)国際機関刊行物、(H)口頭情報。なお、印刷物からの情報は、総て

一九八六年から一九九一年までに出版されたものから採用した。口頭での情報は一九九一年と一九九二年に得たものを採用した。年中行事辞典類は、個々の年中行事の意味を解釈するためにのみ使用した。

現在のところ、既に(A)から(G)までの各ジャンルの日本の文献五八点を検討した(章末の文献資料参照)。収録した年中行事の総数は、約二二〇〇件である。また、比較のために、一九八六〜九一年度のドイツ連邦共和国と旧ドイツ民主共和国のカレンダーの大まかな検討を行った。収録した年中行事総数は、約一八〇〇件である。

入力したデータは次のとおりである。(1)名称(漢字・かな)、(2)名称(ローマ字)、(3)名称(ドイツ語訳)、(4)日付、(5)ライフ・スタイル番号(LSN)、(6)開催地、(7)採集場所、(8)検索語、(9)採集件数、(10)時代、(11)その他の情報——(a)企画・主催者、(b)いつから行われているか、(c)内容、(d)日付を決めた理由、(e)新聞からの採用の場合は掲載箇所、(f)その他。

なお、(E)については、既に一九九一年度の朝日新聞の大まかな検討を行った。毎日新聞は、縮刷版を使って、一九八六年一月から一九八七年二月までの検討を行った。一九八八年から一九九一年までも続けて検討して行く。一九八六年から一九九〇年までの朝日新聞も、検討する必要があるかどうかは、一九九一年度の朝日新聞と毎日新聞の比較を行ってから決める。また、(F)の補充として、総務庁の情報資料、特に行政指導用のポスターの検討を行っている。さらに、最近になって、ヨーロッパ向けの日本の放送JSTVが、いかに季節の年中行事、国家機関主催の年中行事に重点を置いているかがはっきりして来た。ただしテレビ番組の検討は、作業の非効率性の問題もあり、大まかにしか行っていない。

三 総体的分析の試み

一、成立

まず伝統的年中行事について考える。一般に、個々の年中行事の重要性は、その後ろ盾となる機関の重要性に比例する。特に影響力の強いのは、古くからの文化的伝統に則った年中行事である。これらの年中行事は様々な機関に利用される。その中には文部省のような国家機関もある。例えば、文部省が推薦することによって個々の年中行事が教科書に取り上げられるのである。ただ、伝統的な年中行事の場合、私達は、その成立を促した機関について殆ど何も知らない。しかしそれは、それほど重要ではない。長い歴史のうちに、その背景がとて広くなっているからである。

また、新しい年中行事に関しても、その成立を促した機関を知ることにはなかなか困難である。例えば、バレンタイン・デーやサン・ジョルディの日を企画促進したのは誰であろうか。サン・ジョルディの日の場合には、日本書店組合連合会、日本カタルニャ友好親善協会、外務省、スペイン大使館、たけむら・あきこ氏（名古屋）並びに古いたま手箱の協賛で行われたらしい。お風呂の日は東京ガスの発案であり、その提案に沿って毎月二六日に、家族がみんなでお風呂に入ることによって、利益を得るのも同社である。その日に電話をしましょう、と提案されているトークの日はNTTの発案であり、頭髮の日は、全国理容環境衛生同業組合連合会が促進している。では、例えば、花火の日やUFOの日の提案者は誰であろうか。

年中行事に関連している政治的機関、社会的政治的団体としては、次の例があげられる。

政府（四三二例）、地方自治体（三三三例）、職業団体（四一例）、国連（四六例）。中央政府と地方自治体の関与している年中行事数の差を見ると、連邦国であるドイツとの違いが歴然としてくる。また、興味深いのは、利益代表団体と政府の関係である。政府が後援している年中行事は、かなりの割合で受け入れられているのに対し、業界が関与している年中行事は、虫歯予防デーのような、政府も協賛している特別の例を除いて、あまり受け入れられていないようである。それらの年中行事の多くは、規範文献では、年中行事として取り上げられていない。逆に新聞や雑誌には、その多くが取り上げられている。

政府内では、各省の方が、各庁よりも年中行事に力を入れている様である（省／二七二例、庁／一五九例）。個々の機関を比べてみると、厚生省（七九）、建設省（三五）、郵政省（三七）、文部省（三二）、労働省（三一）の順になる。外務省は、七つの年中行事にしか関与していない。各庁の間では、消防庁が二三と、最も多く年中行事に関与しており、文化庁が五で、最も少なかった。

二、テーマについて

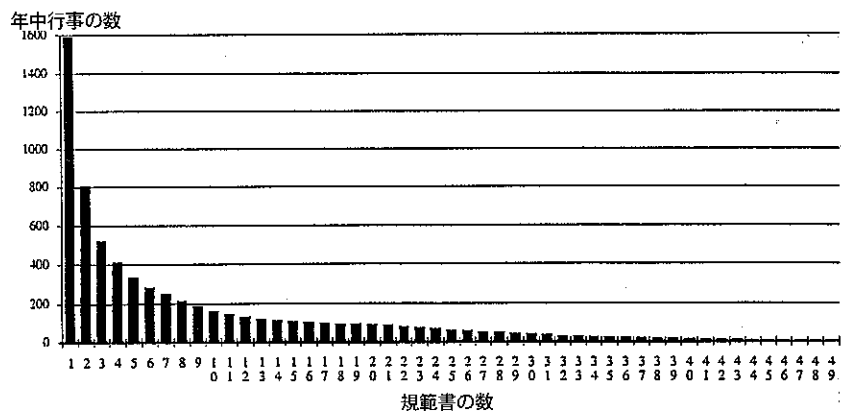
当プロジェクトの重要な長期的課題の一つは、年中行事の様々なテーマを集めることである。その前提として、それぞれの年中行事に内在するテーマを分析する必要がある。現時点では、この課題に、取り組み始めたばかりだが、既に興味深いテーマの分布と順位が見て取れる。この分布と順位は——もちろん注意深く見なければならぬが——日本の社会全体で、重要な意味を持つテーマの分布と順位を考える際に、ヒントを与えてくれるかもしれない。

最も多く現れるテーマは、「重要人物」(四一四例)である。殆どの場合、重要人物の誕生日ではなく、忌日が年中行事日となっている。次に多いのは、「宗教」に関連したテーマ(四二二例)である。そして、「文化」(二五五例)、「自然」(一九二例)、「経済」(二七五例)、「政治」(一五〇例)と続いている。この数値は、まず「宗教」があり、個人的なことからは最後に来るはずといった、外国から見た日本のイメージからは大分掛け離れている。

三、規範文献への受け入れられ方

学問的な調査報告書の類は、個々の年中行事の社会的な受け入れられ方については、多くを語らない。万が一語るとしても、はっきりとは語らない。例えば、クリスマス・イブとお正月の関係について、日本の子供達は、クリスマスよりもお正月を好むことや、その理由について少しは知ることが出来る。しかし、このように限られた範囲の問いかけでさえ、社会的、地域的に非常に狭い範囲の調査をもとにした答えしかない。しかも私達のプロジェクトでは、あえて膨大な数の年中行事を対象にしようとしている。年中行事のよる現象を調査しようとする時、その現象の社会的な影響力というものを無視する訳にはいかないからである。このような質問には、しかしながら「一般的」に答えられるものではない。年令、性別、出身地、経済的背景、学歴などによって定義されたグループを対象としてのみ調査可能な性質のものである。今回の研究では、さしあたり個々の年中行事が、規範文献の著者の間で、どの程度受け入れられているかだけを調査する。

(1)年中行事記述



グラフ1は、個々の年中行事が、何回規範文献に登場するかを表したものである。二二〇〇の年中行事の内、一六〇〇の行事が、それぞれ一回から四九回の頻度で登場するが、一回だけのものを除けば、その数は八〇〇の行事のみとなる。著者たちのうちの五分の四以上の人に取り上げられている行事は、一四しかない。五分の三以上の著者に取り上げられているのは、三九、五分の二以上は八九、五分の一以上の著者に取り上げられているのは、一六九である。

そこで、次の点が問題になってくる。(1)ひとつの文献に現れる年中行事は、全体のほんの一部しか、読者に伝えるべき規範として数えていない。全著者の五分の四は、一四の行事(一%)しか共通して取りあげていないし、全著者の五分の一が共通してあげられる行事にしても、全体の一〇%程にしかない。(2)このような頻度は、何を表しているのだろうか。規範文献の著者たちの間で、それぞれの年中行事の重要性に関するコンセンサスを表しているのみである。複雑な現実社会の中での、年中行事の位置については、必ずしも何か語っている訳ではない。このことは、規

範文献に一度か二度しか出て来ない年中行事を見てみるとはつきりする。頻繁に取りあげられる年中行事は、著者達の（そしておそらくは、一般国民の）意識の中に確固とした位置を占めているが、社会的現実については、何も語っていない。逆に、まれにしか登場しない年中行事の多くは、読者に知られていないということもある。しかし、例外的に、範文献の中には一度か二度しか登場しないものの、日本人の一年のリズムの中に確固とした位置を占めている年中行事がある。紅白歌合戦、国民体育大会、始業式、ゴールドン・ウィーク、ボーナス、夏休みなどで、その数は必ずしも少なくない。(3)日本以外の社会の、たとえば、ドイツの現状の大まかな調査（ポケット判カレンダーより）は、全く別の印象を与える。すなわち、ほんの少数の年中行事に高い関心が集まっている。

四、分散と受容

年中行事の規範体系の、個々の要素の差異がいかなるものであるか、そしてそれらの要素に、いかなる関心が寄せられているか、この二つの疑問について、同時に考えることによって、これらの要素が、文化体系の中でどのような位置を占めているかが見えて来る。

第二次大戦以前から行われている年中行事を、伝統的年中行事とすれば、これらの年中行事は、全般的にしっかりした構成をもっている。そのうち二〇の年中行事は、三〇人以上の著者が取り上げているし、一〇の年中行事は、四〇人以上の著者が取り上げている。意外なのは、正月ではなくて節分が、一番多くの著者に取り上げられていることである（四九人）。なんと正月（四六人）は、盆と一緒に、七夕（四八人）と端

午の節句（四七人）に続いて四位である。

外国人の目から見ると、興味深いのは、上位一〇位までの年中行事のうち、四つの年中行事が、年の始めと関係しているということである（節分、元旦、七草、鏡開き）。このことは、日本の年中行事にとって、「はじめる」ということが、いかに重要な意味を持つかということをも、端的に物語っている。「はじめる」

ことをテーマにした年中行事は、一四五ある。例えば、初詣で、初閻魔、初金比羅、初観音あるいは、書初め、弾き初め、歌い初め、立春、立夏、立秋、立冬、建国記念の日など。

もうひとつ目につくのは、上位一〇位までの中に七つも、「自然」のテーマに関連したものが入っているということである（節分、七夕、元旦、七草、春分、桃の節句、秋分）。

「宗教」というテーマ（四二二行事）をもっと細かく分けてみると、仏教（二二三）の方が神道（一四七）よりも多いという結果になる。このことは、神道の方が、仏教よりも地域性が強いということと関係があるだろう。地域の神道の祭りは、年中行事の中に、数えられていないからである。キリスト教と関係がある年中行事は、五〇ある。儒教は、一一行事と少ない。この意味では、津田左右吉の、日本の精神史における儒教の位置についての意見は、妥当であると言える。しかし、彼岸や盆の様に、儒教の要素も重要な意味を持つ年中行事が、数多く存在することを忘れてはならない。

仏教に関連した年中行事の内、二〇位までの年中行事は、七人から四六人の著者があげられている。一〇位までの年中行事は、一人から四六人の著者が取りあげている。一般的に、広く受け入れられていると言えるだろう。「死」に関連したテーマが多く（七三行事）、その中には、盆（四六文献に出て来る）、春の彼岸

(三九文献)、灌仏会(花まつり)(三七文献)がよく知られているようである。やはり多いのは、閻魔、大師、葉師などの縁日(二四行事)だが、初閻魔(八文献)や、納めの大師(五文献)などを除いて、一般的には、あまり知られていないようである(一文献にしか取りあげられていない)。五二の年中行事に仏教の聖人や学者が出て来る。ブツダ(灌仏会、三七文献に登場)の他には、日蓮(一一)、空海(一〇)、蓮如(三)、良寛(二)、道元(二)、最澄(一)、栄西(一)、法然(一)、親鸞(一)などである。意外なのは、日蓮や空海と道元や最澄、親鸞との差である。

五〇のキリスト教に関係した年中行事の内、四二は、それぞれ一回しか文献に出て来ない。三つの年中行事は、日本の年中行事のサイクルの中にしっかりと根を降ろしている。クリスマス(四二文献に出て来る)、クリスマス・イブ(三七)そしてバレンタイン・デー(二七)である。大分間を置いて、イースター(一七)が続く。それでもイースターの方が、日蓮聖人忌(一一)や涅槃会(一〇)よりも、はるかに多く文献に現れるのである。サンタクロースは、日本の子供達によく知られているにもかかわらず、セイント・ニコラウスは、二つの文献にしか出て来ない。一月六日とは結び付かないようである。サン・ジョルディは、ここ数年、雑誌などで騒がれたわりには、まだ一般化していないようである(一文献のみ)。仏教の年中行事が、「死」と「霊の崇拜」に関係しているのに対して、キリスト教の年中行事は、「愛」に関係したものが多くようである。日本では、クリスマス・イブ、バレンタイン・デー、サン・ジョルディの日などは、男女関係にとって重要な日のようなものである。全体的に見ると、キリスト教は、他の宗教ほど根付いてはいないにせよ、キリスト教の信者以外にとっても、日本の宗教の一つとなっていることが窺われる。

重要人物(四一四行事)の内では、詩人、作家(二二〇行事)が大半を占めている。ただし、一般には、あまり受け入れられていないようである。文献に最も多く登場するのは、正岡子規、樋口一葉、太宰治(各四回)である。次に多いのは、宗教に関係した人物に関するものである(八一行事)。この中で、文献に現れる頻度が高いのは、ブツダ(灌仏会、三七回、涅槃会、一〇回)、神武天皇(建国記念の日、二六回)、日蓮(忌辰法会、一一回)、空海(初大師、一〇回)と、菅原道真(初天神、九回)である。次が画家(一一)である。意外なのは、音楽家が少ないことである(九行事)。この内、日本人四人、外国人四人、チャイコフスキーは、二度登場する。重要人物中、女性は一八行事と少ない。外国の重要人物は、合計三六人登場する。その内訳は、ヨーロッパ二人、アジア八人、アメリカ六人、オーストラリア〇、アフリカ〇である。ドイツからは、六人(マルクス、コッホ、ハイネ、ベートーベン、ゲーテ、ブラームス)、イギリス、六人(ダーヴィン、ハーン、ナイチンゲール、ワット、ジョン・レノン、サッチャー夫人)、ロシア、三人(オパーリン、スターリン、チャイコフスキー)、フランス、三人(パスツール、ドガ、ボードレー)、ギリシャ、一人(アレキサンダー大王)、イタリア、一人(マルコーニ)、ユーゴスラビア、一人(チトー)、オランダ、一人(ゴッホ)、ノルウェイ、一人(アムンゼン)、スウェーデン、一人(ノーベル)、ポルトガル、一人(マゼラン)、スペイン、一人(フランシスコ・ザビエル)。アメリカ合衆国からは、六人(リンカーン、ケネディ、マーク・トウェイン、ジェームス・ディーン、マリリン・モンロー、ライト兄弟)、アジアでは、インド、四人(ブツダ、ボディ・ダルマ、ガンディー、タゴール)、中国、三人(孔子、善導、諸葛孔明)、モンゴル、一人(ジンギスカン)である。

「文化」というテーマに関連しているものでは、三六六の年中行事がある。世界中でも一番複雑な文字の体系をもつと言われる日本だけあって、「書籍文化」に関連した年中行事が二九六と、圧倒的に多い。そのうち、文学についての年中行事が二二四ある。意外と少ないのが、「科学」（四九行事）、「芸術」（三〇）、「哲学」（六〇）、「芸能」（五）である。

書籍文化の中で、詩人や作家の日の他に興味深いのは、国民が、「自分達で書きましよう」と奨励される年中行事である。まず知られているのは、暑中見舞い（一九文献）、年賀状（一七）それに、寒中見舞い（一一）である。残暑見舞い（九）、余寒見舞い（二）などというものもある。また興味深いのは、日本では、新年を、習字や（書初め、二八）皇居での歌会（歌会始め、九）で始めるだけではなくて、毎月一回、手紙を書く日があることである（文の日、一）。まさに、手紙で明け暮れる一年である。私は、日本以外のことは、調べていないので、この「自分で文章を書く」ということに重要性をおくことが、特に日本的な」と形容されるべきことかどうかは、わからない。しかし、この点で日本を凌ぐ文化が、他にあるとは思えない。日本はまさに国民総作家の国である。

自然に関連した年中行事は一九二ある。自然をテーマにしているのは、伝統的な年中行事が多い。正月ではなくて節分、冬の終わりの日、伝統的には、一年の締めくくりの日である節分が、二二〇〇の年中行事の中で、最も多く規範文献に登場する（四九文献）。自然に関連した年中行事で、次に多いのは七夕（四八）で、七草（四五）、春分の日（四四）、秋分の日（四二）と続く。伝統的には新年の祭りである立春は、六番組に多く文献に登場する（四〇）。自然に関係する年中行事は、一般に知名度が高い。文献に登場する

頻度からすると、四〇番目にあたる年中行事でさえ、二〇の文献に登場する。この分野では、新しい年中行事でも、一般に広く受け入れられているようである。愛鳥週間（一三文献）、気象記念日（一一）、世界気象デー（一〇）、環境週間（七）、水の日（七）など。一般にあまり受け入れられていないのは、雪崩防災週間（一）、省エネルギーの日（一）や、猫の日（一）等である。自然に関連した年中行事は、実にバラエティーに富んでいる。これは、多くの日本人が持っている、日本は、自然と深く結び付いた国である」というイメージを支えているようである。

自然は、伝統的な、民俗的なものとしてのみ、年中行事の中で扱われている訳ではない。またレジャー施設としてのみ、見なされている訳でもない。自然は、「慈しみ、保護すべきもの」としても表されている。五五の年中行事が、環境をテーマにしている。鳥類保護、気象、都市緑化、河川の浄化等。木をテーマにした年中行事は、二八ある。門松、山開き、お花見、全国植樹祭等。環境をテーマにした年中行事の内、一〇までが、五回から一三回規範文献に取りあげられている。

「政治」は、年中行事の中では、生活を補助するもの、社会をコントロールするものとして、実用的に捉えられている。世界観のような大きなものが、テーマになっているのではなく、行政と国民が、力を合わせて解決出来るような、現実的な問題がテーマになっている。興味深いのは、世界に関連した年中行事が九三あることである。その中には、国連の年中行事も四〇入っている。国連の定めた日の中では、「世界健康の日」（二一文献）、「世界婦人の日」（二〇）、「世界郵便の日」、「世界平和の日」、「国連の日」（いずれも、九）それに「世界人権の日」（八）が、文献に多く現れ、知名度も高いようである。逆に、日本でまる

で知られていない国連の日は、「国際人種差別撤廃デー」、「侵略による罪のない幼児の犠牲者の国際デー」、「南アフリカの婦人の闘争との国際連帯デー」、「自由、独立および人権の為に戦う南アフリカおよび総ての他の植民地人民との連帯週間」等である。これらの年中行事は、どちらかの派を支援する態度をはっきりさせるので、日本政府が世界政治の中で取ろうとしている中立風の立場と相容れないようである。規範文献の著者たちは、これに従っている。

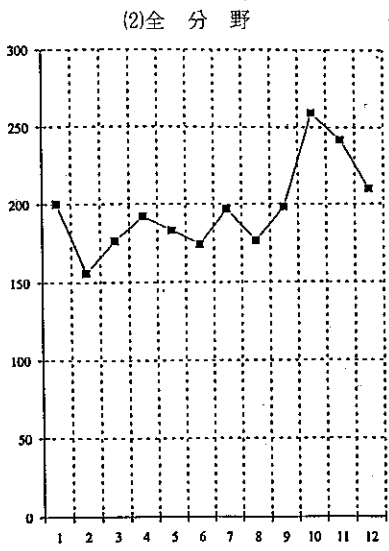
五、季節的分散状況——全般——

年中行事は、一年のそれぞれの月に、どのように分散しているのであろうか。毎月、大体同じ数の年中行事があるのが普通のような気がするが、実際はまるで違っている。現在一番年中行事の多い月は、一〇月で、二五九の年中行事がある。次いで二月（二四二行事）、そして一月（二〇〇行事）である。年中行事の一番少ないのは、二月で、一五六しかない。次いで三月（一七六）と、八月（一七六）が、少ない（グラフ2参照）。この理由は憶測するしかないが、日本の気候とも関係しているのではないだろうか。ドイツ語圏や世界の他の地域と比較してみるべきであろう。

〔旧西ドイツ—日本〕——グラフ3参照。

両国同じなのは、

- (1)八月—九月—一〇月とカーブが上昇している。違いは、



- (1)一月—二月—三月、西ドイツでは上昇して、日本では下降している。(2)三月—四月、西ドイツ下降、日本上昇。(3)四月—五月、西ドイツ上昇、日本下降。(4)五月—六月—七月、西ドイツ下降、日本上昇。(5)七月—八月、西ドイツ上昇、日本下降。(6)一〇月—十一月—十二月、西ドイツ上昇、日本下降。
- 西ドイツ上昇、日本下降。
- 両国間の違いのほうが、両国間の同索性よりも遙かに大きい。特に年の初め（一月—二月—三月）と、年の半ば（五月—六月—七月）と、年の終わり（一〇月—十一月—十二月）の西国間の動きの違いが目立っている。

〔旧東ドイツ—日本〕——グラフ4参照。

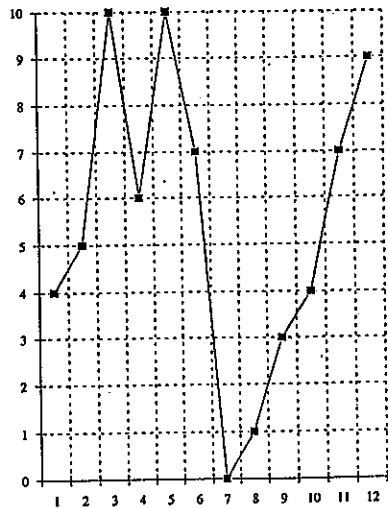
両国同じなのは、

- (1)一月—二月、カーブが下降している。(2)四月、グラフの数値が高い。(3)四月—五月、下降。(4)八月—九月、上昇。(5)十一月—十二月、下降。

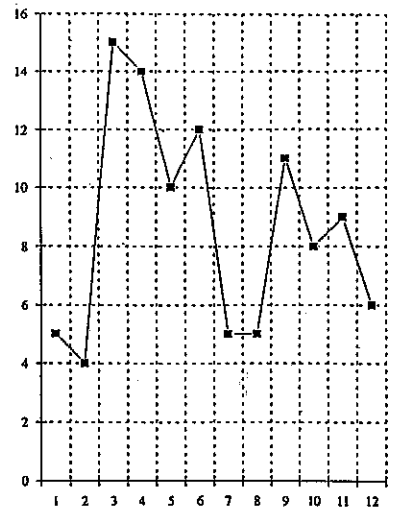
違いは、

- (1)二月—三月、東ドイツ上昇、日本下降。(2)三月—四

(3)ドイツ・全分野



(4)旧東ドイツ・全分野



月、東ドイツ下降、日本上昇。(3)五月―六月、東ドイツ上昇、日本下降。(4)六月―七月、東ドイツ下降、日本上昇。(5)七月―八月、東ドイツ変化無し、日本下降。(6)九月―十月、東ドイツ下降、日本上昇。(7)十一月―十二月、東ドイツ上昇、日本下降。

ここでも、一応、両国間の違いのほうが類似性よりも多いが、目につくのは、年の初め(一月―二月)に両国の動きが同じであること、春に両国とも上昇すること、夏に両国とも落ち込むこと、八月から十二月にかけての

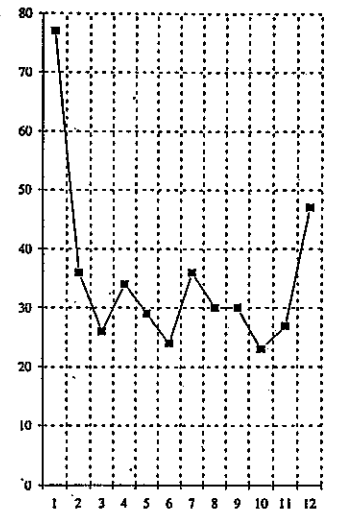
動向が似ていることなどである。グラフの動きを見る限り、日本は旧西ドイツよりも東ドイツと共通性があるようだ。また、内容的にも、日本は西ドイツよりも東ドイツと共通性があることが、折々見えてくる。

六、季節的分散状況——テーマ別——

既に、年中行事全般に関しても、季節によって大きな開きがあることを確認した。次には、個々のテーマ別に、季節的分散状況を調べてみたい。テーマ毎に分けてみても、全般の時と同じようなカーブになるのが普通のような気がするが、現実はまだ違う。テーマ毎にまったく違うカーブになるのである。一年の内の

分散状況に、日本の文化、社会、気候がどのように関与しているかは、十分には調査出来ない。

(5)伝 統



〔伝統的年中行事〕——グラフ5参照。
ここで目につくのは、

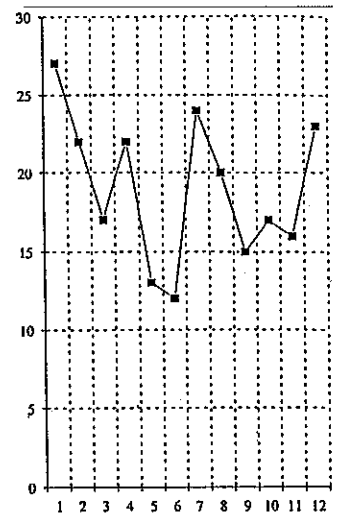
(1)年の始めに、頻度が高いこと。(2)年中行事全般(グラフ2)では、一月から二月にかけて下降しているのに、伝統的な年中行事では、上昇していること。(3)一番低いのが、三月、六月、一〇月であること。(4)年中行事全般と比べて、八月の頻度が高いこと。(5)特に興味深いのは、年中行事全般の頻度が、最高に達する一〇月に、伝統的年中行事の頻度が最低であること。

グラフ全体をしてみると、上下変動の少なさが目につく。また神道だけのグラフは未完成であるが、傾向としては、このグラフ5と共通点が多いようである。

〔仏教〕——グラフ6参照。

わりとなだらかなカーブを描いている。伝統的年中行事のグラフ(グラフ5)と比べると、仏教関連の年中行事のカーブは、上下の揺れが激しい。伝統的年中行事

(6)仏 教



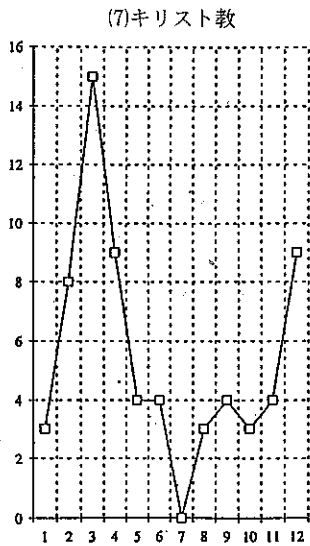
事」のグラフとの共通点は、

(1)年の初めにカーブが下降していること。(一月―二月―三月) (2)六月に頻度が最低であること。(3)七月に上昇が著しいこと。(4)八月に割に頻度が高いこと。(5)一〇月に割に頻度が低いこと。(6)年の終わりにカーブが上昇すること。

『伝統的年中行事』のグラフとの違いは、四月(二三行事)と七月(二五行事)に頻度が高いことである。

〔キリスト教〕——グラフ7参照。

『伝統的年中行事』(グラフ5)と、『仏教的年中行事』(グラフ6)のカーブの特徴は、『キリスト教的年中行事』のカーブと比較してみることに、さらに鮮明になってくる。キリスト教のカーブの特徴は、継続性(一月―二月―三月にかけて、三月―四月―五月―六月―七月にかけて、七月から二月まで)と、あ



る種の緊張感である。この緊張感は、イースター(三月/四月)と、クリスマス(十二月)によってもたらされる。この二つの構成要素のほかに、『伝統的年中行事』のカーブとの違いで、目につくのは、

(1)キリスト教では、一月―二月―三月と、著しく上昇しているのに、『伝統的年中行事』では、著しく下降していること。(2)キリスト教では、三月から七月

にかけて、著しく下降しているが、『伝統的年中行事』では、上昇していること。

『仏教』のカーブと比較しておもしろいのは七月で、『仏教』ではこの月に頻度が最高なのに(二四行事)、『キリスト教』では、最低(〇行事)である。『伝統的年中行事』と、『仏教』のカーブとが似ているのは、年末の三カ月上昇することである。

〔気象〕——グラフ8参照。

『気象』のカーブも、やはり継続性(一月から五月、五月から七月、七月から十一月)と、緊張感との二つの構成要素から成り立っている。この緊張感は、五月から六・七月へ、そして十一月から十二月へのジャンプによってもたらされる。『全般』のカーブと似ているのは、

(1)一月―二月、下降。(2)三月―四月、上昇。(3)四月―五月、下降。(4)六月―七月、上昇。(5)七月―八月、下降。(6)一〇月―十一月、下降。

『全般』のカーブと違うのは、

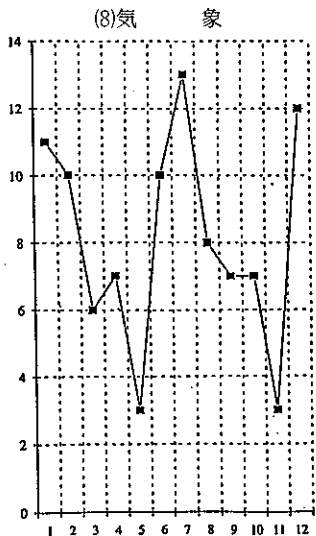
(1)七月が非常に高いこと。(2)一〇・十一月が最高ではないこと。(3)十一月―十二月に上昇していること。

全体的に見ると、気象条件があまり良くない時期に、

頻度が高く(一・二月、六・七月、例外は八月)、気

象条件が良い時期には、頻度が低いことである(三・四

・五月、九・一〇・一一・十二月)。



四 結論、疑問、課題

一、儀式化

日本の社会は、社会的リズムを大切にし、そのリズムを受け入れる用意がある。その背景の下で、年中行事が発達して来ている。この社会のあり方の理由は、簡単には説明出来ないだろう。

年中行事は、人生の儀式化の構成要素である。儀式は不慮の出来事を防ぎ、争い事がコントロール不能になることを防ぐ。儀式とは安全をもたらしてくれるものである。狭い空間の中にある社会として、この安全はとくに重要なものである。日本は、狭い空間の中で発展しなければならなかった社会である。我々が、ドイツと日本の社会を、儀式体系の成熟度に関して比較する時、日本の方が儀式体系の洗練度が高いという結論に達する。これは、一年のサイクルに関してだけでなく、総ての規範に関して言えることである。一般的に言えば、日本文化の生活の方が、ヨーロッパ社会の中のそれよりも儀式化が進んでいると言えるだろう。

私達は、冒頭に掲げたプログラムの枠内で、他の規範の分野においても、『儀式化された行動規範の成熟度』に関して、調査を続けて行くつもりである。この興味のある裏にあるのは、「地球規模で総てが進展していく時代」においては、世界中どこにおいても、生活とは「狭い空間の中の生活」でしかあり得ないという認識である。我々は狭い空間の中での長い生活経験のある文化の行動レパートリーから、何を見いだすことができるだろうか。

二、普遍性

様々な年中行事は、日本文化の多様性の現れである。年中行事を調べることによって、例えば、日本が世界に対して、どれほどオープンになってきたかが解る。逆に、ドイツが、東アジアの、特に日本の現実に即した年中行事を取り入れるなどということは、未だもって考えられないことである。(ドイツ版の盆行事というものは、どうだろうか?) そのような考えを持つドイツ人がいたとしたら、仮に何らかの理にかなうにせよ、ヨーロッパの伝統、ヨーロッパのアイデンティティを持たない、野蛮人と思われるであろう。

その意味では、日本の年中行事は、世界に対して開かれた意識の現れであり、『ヨーロッパの常識』にしか馴染んでいない者にとっては驚きである。この『世界に対して開かれた目を持つ』ということが、これらの日本社会の『普遍性』へと通じる道である。しかし残念ながら、年中行事を見る限りでは、今日の日本にとっての外国とは、相変わらず殆どヨーロッパと北アメリカに限られているようである。その意味では、年中行事にも日本の偏った世界観が表れている。彼らにとって魅力のあるものが、年中行事のテーマとなっている。アメリカの独立宣言(アメリカ独立祭)、フランス革命(パリ祭)、ソビエト建国記念日、アルゼンチン独立記念日など。しかし、国連が推薦するナミビアの自由闘争などは、年中行事には取り入れられない。しかし、ヨーロッパの人間として、自国の状況を改善しない限り、日本社会の態度についてとやかく言う資格はないであろう。

三、非画一主義

調査によれば、大多数のコンセンサスを得ている年中行事は、非常に少ない。ほぼ九〇%の年中行事は、五〇人の規範文献著者の内、一人か二人にしか支持されていない。これは、一般によく言われている、日本社会の画一化的傾向と相容れない。これらの著者の五分の四が共通して取り上げている年中行事はただ一四だけであるが、ドイツのそれと比べてみると、数の上では殆ど同じであることが解る。しかし、ドイツの年中行事のほうが、殆ど全部キリスト教に関係しているという意味で、内容的に画一性が強い。日本の年中行事のほうが、内容的に広がりを持っている。

四、社会的コントロールの手段としての年中行事

殆どの年中行事は、ただ存在している。一体どこから来たのか、誰が考え出したものか、解らない。ただし、年中行事を年中行事たらしめている原動力は国家であり、ごく少数の例外を除いて、中央政府である。国家が後押ししている年中行事は、「生活にアドバイスを与える」ことを目的としており、「精神的に国民を指導する」ためのものである。

ここにドイツの年中行事との大きな違いがある。ドイツの国家は、年中行事に殆ど関与しないからである。このプロジェクトにからんで、ドイツの総ての省庁、そして連邦議会、連邦参議院、連邦情報局その他の重要な政治機関に、日本の年中行事に匹敵する行事に関するの刊行物があるかどうかを質問した。質問を受けた機関は、返事に窮し、少し憤慨したようである。「そのようなものは存在しない」というのが答えであ

あった。どこからも、ドイツの年中行事 に関する情報は得られなかった。日本の各省庁は、すぐに質問の意図を理解し、返事をくれた。例えば郵政省は、年中行事に関する総ての情報を、五メートルもファック スで送付してきた。

興味深いのは、旧東ドイツには、旧西ドイツに比べて、多くの年中行事があったことである。旧西ドイツと比べて目につくのは、(a) 国家、あるいはドイツ社会統一党が定めた年中行事が多いこと。(b) 国民への『道徳的呼びかけ』が多いことである。ただし、(b)については、日本にも東ドイツにも、西ドイツのように道徳の問題を受け持つ強い教会がない、ということが理由の一つであろう。

いずれにせよ、西ドイツと東ドイツ、日本の間に、年中行事に関して、共通点もたくさんあることを、忘れてはならない。すなわち、(1) 一年の変わり目、大晦日と新年。(2) 季節の変わり目、春分、夏至、秋分、冬至。(3) キリスト教の祭日。(4) メーデー。(5) 母の日。(6) 多くの国連の日。

五、疎外感

日本の年中行事の例を見てわかるのは、自然な時間とは、ある特定の空間と気候という場によって規定されるということである。沖縄では、桜は、一月から二月にかけて咲く。だから沖縄の春は一・二月である。北海道では、桜は五月に咲く。だから北海道の春は、五月になるわけである。しかし政治的、社会的時間は、いつも中央権力のある首都に結び付いている。首都が、地方に時の構造を指示することになる。首都のエリート達は、自分達の生活について、例えば、日記を書く。地方のエリート達が、これらの書を読み、最

高の生活様式（ライフ・スタイル）の手本として、規範的に見るわけである。こうして、首都という、空間的、気候的に限定された場所の時間の節目が、その権力の行き渡る場所総ての時間の規範となる。

日本の四季という一つ概念など初めから存在しないのである。規範文献に出て来るのは、一般化された『首都のエリート達の四季』なのである。その意味で、日本が中央権力下に置かれていた時は、いつも『自然の時間からのずれ、疎外感』があったはずである。この種の疎外感、日本の時間が、ヨーロッパの決め付ける世界時間の指揮下に置かれることによってはじめて生じたのではない。後者の場合は、元々あった疎外感が、強まっただけであろう。

世界時間というのは、一年がローマン・カレンダーに従って、冬至の後、一月一日に始まるということである。この時間は、規範的現実になる。今日、日本で幾つもの新年があり（新正月、旧正月、月遅れ正月、小正月、旧小正月、立春正月など）、他の幾つかの伝統的年中行事も、二度か三度行われるというのは、この二重の疎外感の現れである。ドイツでも、日本ほど強くはないが、自然の時間の崩壊の体験はある。ただ、ドイツは、気候的地学的な場所として均一性が強く、日本のように亜熱帯から亜北極まで、無数に分れているということはないし、ヨーロッパとアメリカは、近代になってからは、異文化の異なった時間体系の指揮下に置かれることはなかったもので、その疎外感はまだ強いものではない。

さて、将来的には、地方の時間と、地方の枠を越えた時間の関係は、どのように発展するだろうか？ また新しい疎外感が生じるのであろうか？ 近代以前に戻って、自然の時間と自然の場所を、また統一させるのであろうか？ 私の考えでは、機能的に時間を分けることになると思う。地方の枠を越えたコミュニケー

ションが重要な場合には、ナショナルな時間の他に、インターナショナルな、世界的に通じる時間体系が必要になって来るだろう。最終的には、世界共通の一つの時間、つまり京都が二〇時であれば、チュービンゲンも二〇時であるという所まで行き着くのではないだろうか？ 逆に、大きな枠内のコミュニケーションと無関係の場所では、地方の時間、が支配するであろう。この傾向は、地方の年中行事が増えていることにも現れている。これは他の様々な分野にも広がっている。地方化のプロセスの一環である。この「地方化」のプロセスは、歴史的であり、現実的であり、必然的である。「地球化」のプロセスにバランスをとるための重りの役目を果たしている。年中行事も、地球化のプロセスの重要な一部である。

注

(一) K.Kracht: Japanische Lebensstile. Erscheinungsformen und Genese. Projektbereich Anstandsbücher, 1840-2000. Typoskript, Tübingen 1991.

(二) 西角井正慶『年中行事辞典』、東京堂出版、昭和四五年（二六版）。鈴木棠三『日本年中行事辞典』、角川書店、昭和五三年（三版）。

(三) 角井、二六一ページ参照。

〔文献資料〕

赤木春恵『おばあちゃんの冠婚葬祭知恵袋』夫婦と生活社、一九八七。

朝日新聞(縮刷版)。

飯田英一、藤岡修『冠婚葬祭の事典』西東社、一九八五。

飯田穰『教師のための冠婚葬祭マナー集』小学館、一九八九(図解教育技術実践シリーズ3)。

Leavashi, Kenji 他著『出世する男の常識だワニ』婦人画報社、一九八八。

『大きな文字の実用冠婚葬祭事典』本の友社編集部編、本の友社、一九八九。

小笠原清信『ホームコンサルタント、礼儀作法の百科』小学館、一九八五。

『おはようおやすみ』原井利夫、大井清吉編、福村出版株式会社、一九八六(シリーズ生活を学ぶ2)。

平成三年度各省庁広報予定事項、内閣総理大臣官房広報室、一九九一。

金谷千都子『冠婚葬祭しきたり百科』日本文芸社、一九八八。

金谷千都子『冠婚葬祭のすべて』日本文芸社、一九九一。

川崎陽子『冠婚葬祭のすべてがわかる事典』西東社、一九八八。

『冠婚葬祭のすべて』古川純香編、池田書店、一九八八。

桔梗泉『目でわかる冠婚葬祭の知識百科』主婦と生活社、一九八八。

木村弥子『新三六五日のおつきあいと冠婚葬祭百科』主婦の友社、一九八八。

『Campus Diary '89/4-'90/3』全国大学生共同組合連合会、一九八九。

講談社編『暮らしの歳時記』講談社、一九八六。

『広報歳時記』平成三年版(広報臨時号)『日本広報協会編、一九九一。

神山信也『図解冠婚葬祭入門。誕生から葬儀までの式事小百科』新星出版社、一九八六。

一九九一年国連会議と特別行事、国際連合広報センター、一九九一。

佐久間進『冠婚葬祭しきたり百科』永岡書店、一九八九。

塩月弥栄子『塩月弥栄子の冠婚葬祭事典』講談社、一九八七。

塩月弥栄子『図解冠婚葬祭と実用手紙百科』講談社、一九八七。

式田和子『女性のための冠婚葬祭入門、そんな場合はどうしましょう』三笠書房、一九九〇。

遠藤周作監修『Just冠婚葬祭マナー事典』旺文社、一九八六。

相賀徹夫『新女性全集、シャトレイヌ1、冠婚葬祭のマナー』小学館、一九八六。

『すぐ役に立つ冠婚葬祭』生活研究グループ編、教育出版センター、一九八八。

真尾 栄『生活の新常識百科』主婦と生活社(主婦と生活、生活シリーズ)。

千宗室、酒井美意子、磯村尚徳『おつきあいの常識と式辞挨拶手紙実例現代マナー事典』講談社、一九九〇。

一九九一 平成三年禪茶のころ(カレンダー)。

竹原聖千『他人に聞けない冠婚葬祭』ひばり書房、一九八八。

竹原聖千『恥をかかない冠婚葬祭』ひばり書房(ホームライブラリー)、一九八八。

田島諸介『冠婚葬祭全書』梧桐書院、一九八八。

竹田七郎『ビジネスマンのための冠婚葬祭』学研、一九八七。

千宗室、千宗之(監修)『茶の湯歳時記事典』平凡社、一九九〇(上下)。

『チャンスブック、冠婚葬祭事典』旺文社編、旺文社、一九八八。

津軽東洋『実用大百科冠婚葬祭諸式のすべて』ナツメ社、一九八八。

- とよた時『イラストひとの一生なんでも事典』富民協会、一九八七。
- 十返千鶴子『コミックスフォアレディースライフ。冠婚葬祭』集英社、一九八八。
- 『ど忘れしきたり事典』新用事用語研究会編、教育図書、一九八五。
- 鳥居哲男『恥をかかないビジネス交際12カ月』曜曜出版社、一九八七。
- 樋口清之『冠婚葬祭特選』学研、一九八七。
- 野中弘子『30からの冠婚葬祭、つきあい上手のお金の包み方、使い方』大和書房、一九八八。
- 樋口清之『日本人の「しきたり」ものしり辞典』大和出版、一九八七。
- 『ビジネスマンのための冠婚葬祭入門』くらしの友編、大陸書房、一九八九。
- 『ビジネスマンのための冠婚葬祭便利帖』PHP研究所編、PHP研究所、一九九一。
- 『目でわかる最新冠婚葬祭知識百科』主婦と生活社編、一九八七。
- 平井照敏『新歳時記全5巻』河出文庫、一九八九。
- 藤枝秀峰『すぐに役立つ日常生活のエチケット』棋苑図書、一九八六。
- 本多明雄『日常のマナー事典』西東社、一九九〇。
- 毎日新聞(縮刷版)。
- 松田智恵子『これで安心冠婚葬祭のマナー』泰光堂、一九八七。
- 水原秋桜子『カラー図説日本大歳時記、全5巻』講談社、一九八九。
- 森本毅郎『OL、ヤングミセスの冠婚葬祭。恥をかかないおつきあいのマナー、作法と金額の目安』CBSソニー出版、一九八八。

- 成美堂出版編『よくわかる冠婚葬祭のすべて』成美堂出版、一九九〇。
- 吉沢久子『冠婚葬祭マナー事典』時事通信社、一九八八。
- 吉沢久子『すぐに役立つ冠婚葬祭百科』成美堂出版、一九八九。
- 吉沢久子『ホームコンサルタント。いざという時の生活事典』小学館、一九九〇。